＜前回：５．隠喩・レトリック３＞

０．隠喩論の課題：

・隠喩の意味（意味とは言語を含めて記号体系一般において存在する体系内の諸記号の相互関係（差異性、差異の体系）と解釈できる。記号（ソシュールの言い方を借りれば、シニフィエとシニフィアンからなるシーニュ）の意味は、個々の記号表現に実在的に付随しているのではなく、他の諸記号との関係性。意味の実体論から関係論へ）

・隠喩の指示（Referance/Bedeutung）

宗教言語あるいは神学的言語における隠喩の指示の問題。「隠喩的表現と特徴づけられた宗教言語が、指示を持ちうるのか、あるいはその指示対象とはいかなる実在性を有するのか」＝神学的実在論の問題。

宗教言語論あるいは聖書学、また科学言語論において、それぞれの領域に現れる隠喩表現についての強力な非実在論の存在。

**（１）隠喩の指示をめぐって**

１．イエスの譬え＝「神の国の譬え」（次回以降）

イエスの譬えは、キリスト教信仰者の主観的な宗教経験との関わりにおいて一種のフィクションとして意味のみがあるのであって、その指示対象の実在性など学問的な探求の対象とはなり得ない、これに対して我々はいかに答えるべきであろうか。

神の国はいかなる実在か？

↓

そもそも人間にとって現実とは実在とは何かが。近代的啓蒙的な主観客観図式を素朴に前提にした真理論や実在論、あるいはその延長上にある論理実証主義の議論は、もはや妥当性を失っており、我々は隠喩の指示と指示対象の実在性を論じる過程で実在論や真理論の問い直しを同時に行わねばならない。

２．記号体系外部とその記号との関係。指示において問題となるのは、記号が自己完結的な存在ではなく、その外部を有すること。

・日常言語：言語の指示対象の実在論の肯定は自然な態度。素朴実在論。

・文学的美的な言語使用や、宗教的な言語使用、さらには科学における理論言語についても、素朴実在論はそれぞれの言語使用の内的理由から成立が困難

・指示対象がいわば存在しない、あるいはその存在は重要ではない、という主張。

　・構造主義：詩的機能＝自己指示性（ヤコブソン）

　・ブルトマンの非神話論化

　　実在への指示ではなく、実存的決断の呼びかけ

　　神話・世界観　　信仰・主体性

・宗教言語の非実在論は最終的に宗教言語の無意味化・無価値化を帰結。

３．詩的隠喩や文学テキストに関してリクールが行う指示の二重性、二つの指示の区別。

・隠喩においては対象についての複数の解釈の相互作用の結果、日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される。意味の隠喩的歪み・よじれは、その意味に基づいて生じる指示対象の確定を不可能にする（＝第一度の指示の中断）。

・詩的あるいは宗教的な隠喩表現がこの第一度の指示の中断を条件として第二度の指示作用を発生。

・意味のよじれ→新しい意味の生成（発見）→第二度の指示

　隠喩・対象についての複数の解釈の相互作用

　→　日常言語におけるような日常的経験的実在への指示機能は中断される（＝第一度

の指示の中断)。意味の隠喩的歪み・よじれ：その意味に基づいた指示対象の確定を不可能にする。

→　第一度の指示の中断を条件とした第二度の指示作用の発生。

フィクションは現実ではないということを否定的な条件として、それ固有の世界を指示する。

４．第二度の指示の指示対象とは、実在の日常的イメージの模倣ではなく、実在の新しい解釈・見方の開示であり、前方へと投影され再構成された実在。

５.「隠喩の指示＝第二度の指示」とすれば、隠喩についても実在との対応 ── 日常経験における実在ではないが ── を論じ、その真偽を問うことが可能になる。

６．問題：

①　意味・構造から指示の生成をどのように説明できるのか。これは人間の言葉が神の言葉になるという問題の言い換えである。

②　こうして生成した指示あるいは指示対象（テキスト世界）と我々の日常世界はどのように関係づけられるのか。

８.「では、リクールの言う第一度の指示から第二度の指示への中断を通した開示はどのようにして生じるのであろうか。」cf. 詩的言語や科学言語の場合。

・宗教的隠喩における指示が「高次の実在」（シュライアマハー）に関わる指示機能であるとするならば、神学は科学言語ばかりでなく、詩的言語との類比からも離れた独自の議論を展開するよう要求されることになる。

もしこれが不可能であるとするならば、宗教は完全に人間的な可能性に還元されることになる。

９．ティリッヒの象徴論。

宗教言語における第二度の指示の開示は、神学的には啓示論によって説明されるべき。

10．帰結

・人間的現実の構成。人間的現実は奥行き・深みを有している。理念・美・そして宗教。

・人間の日常性自体が隠喩的構造を有するとすれば、虚構と現実の二分法も廃棄されねばならなくなる。では、真理の基準とは何か。歴史に対する文学の優位（アリストテレス)。→小坂井敏晶『神話という虚構』東京大学出版会、2002 年。

## ６．イエスの譬え解釈１

### （1）「イエスの譬え」解釈史の概要

１．イエスの宗教運動　→　「神の国」運動・「神の国」の論理・秩序

→　既存の秩序（「敵－味方」の二分法）を批判し相対化する。

別の秩序をイメージ化する

→　開かれた食卓：罪人、女性、子供

２．新しい隣人理解（自己理解）の現実化としての「神の国」

隠喩としてのイエスの譬え、指示対象としての神の国

３．1950 年代ごろまでの譬え解釈の歴史・概要

・譬えは、教育的な役割。教義を初心者向けにわかりやすく説明する。

→　教義を読み取る。アレゴリカルな解釈・教義的解釈。

・譬えは、イエスの宗教運動の基礎資料。イエスに帰れ。イエスの意図と最初の聴衆の理解を再構成する。歴史的解釈・近代聖書学。

４．エレミアスの譬え研究：イエスの状況と原始教会の状況との比較

・アレゴリカルな解釈は新約聖書自体に遡る。
　マルコ福音書の「種まきの譬え」（マルコ福音書の譬え論）
　　種＝神の言葉
　　鳥＝サタン
　　石だらけの土地＝艱難や迫害にすぐつまずく人
　　茨の中＝思い煩い･誘惑･欲望に心をふさがれている人
　　良い土地＝神の言葉を受け入れ、実を結ぶ人
・アレゴリカルな解釈の本質と問題性
　a.「共同体の外部と内部の区別」は譬え解釈に次のような役割を与える。
　　1.外部向けの教えの形式→秘密の教え＝奥義を外部の者から守る
　　2.教育的機能
　b. 隠喩の代置理論（Substitution Theory）＝古い隠喩理論：暗号と暗号解読

＜種まきの譬え（マルコ福音書）＞
4:1　イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。おびただしい群衆が、そばに集まって来た。そこで、イエスは舟に乗って腰を下ろし、湖の上におられたが、群衆は皆、湖畔にいた。2 イエスはたとえでいろいろと教えられ、その中で次のように言われた。
3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の中に落ちた。すると茨が伸びて覆いふさいだので、実を結ばなかった。8 また、ほかの種は良い土地に落ち、芽生え、育って実を結び、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍にもなった。」9 そして、「聞く耳のある者は聞きなさい」と言われた。
10　イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちとがたとえについて尋ねた。11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。12　それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」13　また、イエスは言われた。「このたとえが分からないのか。では、どうしてほかのたとえが理解できるだろうか。
14 種を蒔く人は、神の言葉を蒔くのである。15 道端のものとは、こういう人たちである。そこに御言葉が蒔かれ、それを聞いても、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれた御言葉を奪い去る。16　石だらけの所に蒔かれるものとは、こういう人たちである。御言葉を聞くとすぐ喜んで受け入れるが、17　自分には根がないので、しばらくは続いても、後で御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう。18　また、ほかの人たちは茨の中に蒔かれるものである。この人たちは御言葉を聞くが、19　この世の思い煩いや富の誘惑、その他いろいろな欲望が心に入り込み、御言葉を覆いふさいで実らない。20　良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて受け入れる人たちであり、ある者は三十倍、ある者は六十倍、ある者は百倍の実を結ぶのである。」

## （２）近代的な譬え解釈（ユリヒャー以降）
５．20 世紀の譬え研究動向はごく最近まで、ユリヒャーの示した議論（「７」）の内の歴史性の議論の線上で展開してきた。ブルマンも、ドッドも。その到達点は、エレミアスに

おいて確認できる。

・アレゴリカルな解釈からの決別　→　譬えの歴史性と文学性

・隠喩の代置理論、アリストテレスの修辞学　→　文学性の理解における限界

・歴史性への過度の集中、歴史への偏重

文学的言語的な分類の問題は歴史的社会学的問題設定に従属している。

・エレミアス：新約聖書テキストはもっぱらその歴史的原初形態（イエス自身の言葉）の再構成のための資料として理解されている。

「彼の譬えはみな、現実生活の特定の歴史的場（環境）で語られたものである。さかのぼってその場を再発見する試みが、私たちの課題である。イエスはさまざまな特定に機会に何を言おうとされたのであろうか。イエスの言葉は聴衆にどのような影響を与えるべく語られたのであろうか。これらの問題を提起する理由は――ｇきる限りではあるが――イエスの譬えの最初の意味を探り出すためであり、イエスご自身の言葉に辿り着くためである。」(11)

「原始教会よりイエスの帰れ！」「イエスがそれを語られた時のそもそもの生活の場を再現することが試みられねばならない。」「譬えを変形されせた若干の確かな法則」(15)

・イエスの譬えはアリストテレス的な修辞学とは別の法則性の基づいている。

新しい隠喩理論の必要性(前回)

６．エレミアス以降、新しい言語論・文芸批評学の影響

1.文学性の復権、反歴史主義：構造主義的譬え解釈

2. 文学性と歴史性とのバランスの回復から思想へ

↓

解釈学的プロセスに基づく譬え解釈（次回）

これは歴史概念と言語概念との本格的な問い直しを要求する。

７．**Adolf Jülicher,** *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt 1976(1888 / 1899)

Erster Teil: Die Gleichnisreden Jesu im Allgemeinen

Zweiter Teil: Auslegung der Gleichnisreden der drei ersten Evangelien

Echtheit / Wesen / Zweck / Wert

Kampf gegen die allegorisierende Auslegung (50)

Allegorie: ein Satzgefüge, das eine zusammenhängende Reihe von der Deutung bedürftigen Begriffen bietet. Die sprachliche Vorstufe der Allegorie ist Metapher.

Metapher: das Grundelement uneigentlicher Rede　　cf. Vergleichung

das Gleichnis: die auf ein Satzganzes erweiterte Vergleichung (58)

Die Echtheit der evangelischen Parabeln ist keine absolute.

fast ohne Ausnahme haben sie einen echten, auf Jesus selber zurückgehenden Kern. (11)

sie zu dem Sichersten und Bestüberlieferten gehören, was wir an Reden Jesu noch besitzen. (24)

der Begriff des Vergleichens, Verähnlichens das Fundament des Wortes bildet. (36)

nicht bloße Begriff, sondern ein vollständiger Satz

Maschal: eine vergleichende Rede und insofern eine rhetorische Kunstform (37)

Aehnlichkeit zwischen dem Verhältnis der Begriffe der einen Seite und dem der Begriffe der andern Seite.（70）　　a:b= $\alpha$ : $\beta$ （69）

analogia proportionalitatis（Aristoteles.　Rhetorik, Logik, Ontologie）

Das Gleichnis will, wie die Vergleichung ein Wort, so einen Gedanken durch ein homoion beleuchten, daher man auch bei ihm nur von einem tertium comparationis redet.　(70)

Erkenntnishilfe: Sache / tertium comparationis / Bild

**（３）譬え解釈との関わりにおける聖書学の現状**

８．近代聖書学の成立の意義：教義学より聖書学の自立

アレゴリカルな解釈からテキストの歴史的言語的分析へ

↓

９．問題性：

１）テキストの思想性への接近困難あるいは既存の思想への短絡

２）歴史性、文学性、思想性の分裂状況

聖書学と聖書神学の分裂、現代において聖書神学は可能か

３）聖書学の諸方法の細分化･専門化。

方法論上の混乱、自分の立っている位置が見えない。

(1) 旧約聖書と新約聖書　→　キリスト教の自己理解の混乱、聖書神学の試み

(2) イエスとパウロ、イエスの宗教運動の継承に関する多様性とパウロ的伝統

(3) 新約聖書と教父学・キリスト教古代史

田川建三『書物としての新約聖書』（勁草書房）

新約聖書概論の中の「序説」「補遺」（新約聖書概説序説）

↓

聖書テキストとは何であり、その解釈・理解はどのようにして可能になるのか？

聖書学の方法論を再考する必要性

↓

歴史性、文学性、思想性を、聖書解釈の中に位置づけ直し、統合する必要性。

**（４）譬え解釈の手順　→　解釈学的プロセス**

0) 予備的考察（文学的・歴史的・思想的）

1) 歴史性

2) 文学性：構造分析 / 譬えの文学的機能・効果 / 読解プロセスの再現

3) 思想性・思想理解: 神の国はいかなる仕方で現前するか、何をもたらすか。

**＜構造分析の階層性＞**

**連辞（syntagm）と範列（paradigm）**　→　構造主義：可能な譬えの全体

・単一の譬えの構造

・譬え群（譬え集）の構造

・新約聖書の文書単位の構造

・新約聖書の構造

・聖書の構造

**＜タラントの譬え：マタイ 25.14-30 ＞**

14　「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。15　それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人に

は二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、16　五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。17　同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。18　しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。19　さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。20　まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました。』21 主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』22 次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました。』23　主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』24　ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、25　恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠しておきました。御覧ください。これがあなたのお金です。』26 主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。27　それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。28　さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。29　だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。30　この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。』」

**＜ムナの譬え：ルカ 19.11-27 ＞**

11　人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。12 イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。13 そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。14　しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。15 さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。16 最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。17 主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』18　二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19 主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。20 また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。21　あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』22 主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。23　ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』24 そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』25　僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』

と言うと、26 主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。27　ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』」

＜解釈の試み１＞

◆予備的考察

1)共観福音書の譬え集

マタイ 13.1-51：種を蒔く人の譬え、 天の国の譬え、譬え論

毒麦の譬え、からし種とパン種の譬え

13.1-23,31-35 はマルコ、ルカと並行箇所

18.10-14:迷い出た羊の譬え（ルカ）、21-35:仲間を赦さない家来の譬え

20.1-16:ぶどう園の労働者の譬え

21.28-32:二人の息子の譬え、33-44:ぶどう園と農夫の譬え

22.1-14:婚宴の譬え（ルカ）

24.45-51:忠実な僕と悪い僕（ルカ）

25.1-13:十人のおとめの譬え、14-30:タラントの譬え（ルカ）

2)教えの形式：群衆に対する教え / 弟子に対する教え / 論争の場面

内容：神の国・裁きの教え、終末に備えた勧告（目を覚ましていなさい）

終末時の人間の二つのグループへの分離（対照的な二つのグループ）

3)本文批判（解釈すべきテキストの範囲）

25.14a+14b-27+28+29-30

28 の個別的命令が 29 で普遍化されている

30：永遠の罰を下す再臨のキリスト（キリスト論的解釈）

4)譬えのテーマ：神の国

◆考察

1)歴史性

1.マタイ福音書におけるこの譬えの位置づけ

マタイにおける譬えの機能、教え・勧告・論争

2.ルカの並行記事との比較

・マタイとルカに共通している点からＱ文書に由来すると思われる。

佐藤研　「Ｑ文書」(『現代聖書講座第２巻』日本基督教団出版局）p.276f.

マタイの方がルカよりも譬えの原型を保存している。

3. 譬えに組み込まれたあるいはその背後にあるテキストのレパートリィー

・１タラント（＝デナリオン）＝ 6,000 ドラクメ

１デナリオン：一日の賃金

ムナ：100 ドラクメ

・主人－僕、銀行：古代地中海の商業活動→ユダヤの大商人（都市支配階層）

極端な貧富の差、階層格差

諸対立：都市と農村、大土地所有者と小作・農業労働者

笠原義久「１世紀の東地中海世界の社会構造」(『現代聖書講座第１巻』)

2)文学性

・構造：

1）14a

14b-15、16-18、19-27:19 / 20-21 / 22-23 / 24-27

28、29、30

2）D=master

R1=5+2 talent servants

R2=1 talent servant

Determiner / Respondent

the Ten Maidens

cf. comic / tragic : Laborers in the Vineyard, Great Supper,

Good Samaritan, Prodigal

・聴衆における聴聞プロセスの再現

1. 弟子は？　敵対者は？　群衆は？）　2.初期教団のメンバーは？

・読解プロセス

なぞ、違和感！　→　問いの提示、探求、自己の存在様態への反省

我々現代人にとって終末の現実性とは？

このような終末との関わりにある現代人＝我々とは何者か

3)思想性（思想理解）

1.14-27:神の国とは？　大商人としての神！

神の国はあらゆる期待を超えている､その意味で現実と徹底的なコントラストにある。

2.14-30:この譬えは原始教団の状況（終末の遅延）を反映したものか？

伝道する教会の状況、終末の遅延

3.終末を意識することの意義？

現実をトータルに批判する視点の獲得（現実の相対化）

限られた有限性における生の価値

適切な行動・応答の要求、 危機としての神の国の到来

＜解釈の試み２＞

10．**Paul Ricoeur**," Listening to the Parables of Jesus."

What makes sense is not the situation as such, but, as a recent critique has shown, it is the plot, it is the structure of the drama, its composition, its culmination, its denouement. （240）

a network of intersignification, to understand each one in the light of the other （242）

Mt.13:45-46,47-49

Three critical moments emerge: *finding* the treasure, *selling* everything else, *buying* the field （240）

Event（the newness）/ Reversal / Doing

the event comes as a gift. （241）

The power of this language is that it abides to the end within the tension created by the images.

think through the richness of the images / metaphor （242）

The challenge to the conventional wisdom is at the same time a way of life. We are first disoriented before being reoriented.

reorientation by disorientation, extravagance

this dramatization is both paradoxical and hyperbolic. （244）

surprising strategy of discourse.

To listen to the Parables of Jesus, it seems to me, is to let one's imagination be opened to the new possibilities disclosed by the extravagance of these short dramas. If we look at the Parables as at a word addressed first to our imagination rather than to our will, we shall not be tempted to reduce them to mere didactic devices, to moralizing allegories. We will let their poetic power display itself within us.

poetic power of Parables / the Event / Reversal / Decision（moral）　(245)

cf. Crossan, McFague

11. **J.D.Crossan**, *In Parables. the challenge of the historical Jesus*, Harper & Row,1973.

Parables of Advent : The Sower, The Mustard Seed

Parables of Reversal : The Good Samaritan

Parables of Action : The Wicked Husbandmen, The Servant Parables

Group A: The Doorkeeper, The Overseer, The Talents, The Throne Claimant

Group B: The Unmerciful Servant, The Servant's Reward, The Unjust Steward, The Wicked Husbandmen, The Vineyard Workers

In Group A normalcy of world was reflected in harmony of structure and homogeneity of development. In Group B the questioning of this normalcy is reflected in the total lack of structural homogeneity.　(116)

The parables of action all challenge one to life and action in response to the Kingdom's advent. But the Servant parable introduces a very disturbing note into all this. The temporality of the Kingdom appears in the three simultaneous modes of advent, reversal, and action. But as advent takes priority over reversal, so does this latter over action. In the eight parables of the Servant cluster a theme is presented in ordered normalcy and then is just as carefully reversed and shattered. Like a wise and prudent servant calculating what he must do in the critical reckoning to which his master summons him, one must be ready and willing to respond in life and action to the eschatological advent of God. But, unfortunately, the eschatological advent of God will always be precisely that for which wise and prudent readiness is impossible because it shatters also our wisdom and prudence.　(119f.)

＜マタイ＞

13:44　「天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。45　また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。46　高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。47　また、天の国は次のようにたとえられる。網が湖に投げ降ろされ、いろいろな魚を集める。48　網がいっぱいになると、人々は岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。49　世の終わりにもそうなる。天使たちが来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、50　燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」

12. イエスの譬え　→　神の国の現実の開示（第二度の指示）

・言葉の出来事：発見・驚き・喜び　→　存在（構想力）の転換　→　実践

・受容されていることの認知（受容されていることを受容すること）

acceptance of being accepted：ティリッヒ

自己との和解

↓

開かれた食卓、拡大され更新された家族（神の家族）

＜参考文献＞


１． Adolf Jülicher, *Die Gleichnisreden Jesu. Zwei Teile in einem Band*, Darmstadt 1976（1888 / 1899）

２． Joachim Jeremias: *Die Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1984[10]（1947）

３.Walther von Loewenich: *Luther als Ausleger der Synoptiker*, München, 1954.

４.Rudolf Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, Göttingen, 1979（1921）.

５.C.H.Dodd, *The Parable of the Kingdom*, New York, 1961（1935）.

６． Eta Linneman, *Gleichnisse Jesu*, Göttingen, 1978（1961）.

７． Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus*, Tübingen, 1979（1962）.

８． Archibald M. Hunter, *The Parables Then and Now*, Westminster Press, 1971.

９． Bobert H. Stein, *An Introduction to the Parables of Jesus*, The Westminster Press, 1981.

10.Robert W. Funk, *Language, Hermeneutic, and Word of God*, New York, 1966.

, *Parables and Presence*, Fortress, 1982.

The Good Samaritan as Metaphor

11.Dan Otto Via, *The Parables.Their Literary and Existential Dimension*, Fortress, 1967.

12.John Diminic Crossan, *In Parable. The Challenge for the Historical Jesus*, New York, 1973.

13.Amos N. Wilder," An Experimental Journal for Biblical Criticism. An Introduction," in: *Semeia* 1,1974.

, *Jesus' Parables and the War of Myths*, Fortress, 1982.

14.Norman Perin, *Jesus and the Language of the Kingdom*, Fortress, 1980（1976）.

15.Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*, Fortress, 1976.

16.Paul Ricoeur, "The Language of Faith / Listening to the Parables of Jesus," in: Charles E. Reagan and David Stewart（eds.）, *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press, 1978.

17.Wolfgang Harnisch（hrsg.）, *Gleichnisse Jesu. Positionen der Auslegung von Adolf Jülicher bis zur Formgeschichte*, Darmstadt, 1982.

18.Robert W.Funk, Bernard Brandon Scott, James R. Butts, *The Parables of Jesus. Red Letter Edition. The Jesus Seminar*, California 1988

19.Eduard Schweizer, *Jesus, das Gleichnis Gottes*, Göttingen, 1996（1994）.